

学生大使 実施報告書

氏名：齋藤晃士朗

学部・学科(コース)・学年：理学部 理学科 化学コース 3年

派遣先大学：新モンゴル学園

派遣期間：2/26～3/11

1 日本語教室での活動内容

新モンゴル学園の学生に、日本にまつわるさまざまなテーマで発表を行いました。発表は上級者向けと中級者向けに分かれており、私は「日本の若者(上級者向け)」と「ツアガーサルの感想(初級者向け)」を担当しました。新モンゴル学園の学生からも、モンゴルにまつわるさまざまなテーマで発表をしてもらいました。活動中はたくさんの質問や会話が飛び交い、お互いの文化について知ることのできる良い機会となりました。

2 日本語教室以外での交流活動

今回の学生大使派遣期間は、モンゴルの旧正月「ツアガーサル」と重なっていました。ツアガーサルでは親戚や友人の家を訪問する慣習があるため、私もホストファミリーの一員として多くの家を訪問し、また多くの客を歓迎しました。

また日本に留学する予定がある、または留学したい新モンゴル学園の中学生、高校生たちと対話する機会を設けていただき、日本語を学習するうえでのアドバイスなどをさせていただきました。

また新モンゴル学園の学生にモンゴルの観光名所を案内してもらったり、ドライブに行ったり、他にもボウリング、飲み会、ショッピングなどを一緒に楽しみました。

3 参加目標への達成度と努力した内容

まず、たくさんの人と仲良くなるという目標についてですが、文句なく達成できたと思います。ホストファミリーのサカとその家族とは、2週間のホームステイを通して絆を深めることができました。また、他の学生大使のホストたちも皆、新モンゴル学園の現生徒・元生徒なので、サカを通して仲良くなることができました。

日本の文化を広めるという目標についても、新モンゴル学園の学生たちとの会話の中で、多くの事を伝えることができました。皆さんはとても日本が好きであると話してくれて、私たちの生活について質問し、興味深く聞いてくれました。

また、英語で話す機会があったら挑戦したいという目標についても、完璧とはいえずとも達成することができたので良かったです。というのも、新モンゴル学園の生徒たちは皆日本語がとても達者で、日常の会話で意思疎通に困るといったことはほとんどなかったのですが、それでもやはりどうしても意志が伝わらなかったり、分からない単語があったりしました。そのようなときに英語を用いて話すことによって、意図が通じるということがたくさんありました。これは彼らの英語のレベルが非常に高いことによって実現しているのですが、私にとっては自分の英語が伝わったことが嬉しく、自信に繋がりました。

4 プログラムに参加した感想

まず、私ははじめこのプログラムへ興味本位で応募したので、正直なことを言うと出発に近づくにつれて行きたくない気持ちが大きくなっていきました。ホストファミリーについても、到着直後までまったく情報が得られなかったこともあり、怖い人だったらどうしようという不安が募っていました。しかしながら、モンゴルに到着した夜、ホストファミリーの皆さんは私を温かく迎えてくれました。お父さんが作ってくれた料理を食べたとき、私の不安がほどけていくのを実感しました。

到着した次の日は学校があり、他の学生たちと初めて対面しました。仲良くできるかという不安はまったくの杞憂で、すぐにみんなと打ち解けることができました。この日はモンゴルでの2週間の計画を立てることが中村先生からの課題だったのですが、モンゴル人の先をあまり考えない性格に流され、まったく計画が定まらないという洗礼を受けました。しかしながら、これも文化の違いだと捉えることで、楽しい時間を過ごすことができました。

到着3日目からは、モンゴルの旧正月「ツァガーサル」が始まりました。大晦日には日本と同じように大掃除や正月料理の準備を手伝い、そして元日からは怒涛の大移動が始まりました。ツァガーサルでは親戚や知り合いの家を訪問する慣習があるため、私たち家族は多くの家を回りました。ただ回るだけなら大したことはありませんが、どの家に行っても伝統料理のボーズや 40%もあるウォッカを勧められ、私の胃が休まることはありませんでした。極めつけはウランバートルの大渋滞で、親戚の家を訪問するためたった5km を移動するのに3時間もかかるということが続きました。この期間は肉体的にも精神的にもとてもハードでしたが、モンゴルの伝統料理や文化に触れる機会がたくさんあり、とても勉強になりました。

ツァガーサルが終わって学校が始まり、ようやくゆっくりできると思ったのも束の間、毎日たくさんの学生たちが私たちのもとへ訪れ、様々な場所へ連れていかれることになりました。彼らの体力は無尽蔵で、毎日5時間近く遊んでもまったく疲れた素ぶりを見せませんでした。私たちは彼らについていくだけで精一杯でしたが、おかげで多くの学生たちと関わることができ、絆を深めることができました。疲れは積もりましたが何よりも楽しかったのも、彼らと一緒に遊んだことはとても良い思い出です。

最後に、この2週間はとても忙しく、あっという間に終わってしまいましたが、私の人生のなかで最も刺激的で濃密なものでした。このような経験をさせてくれたモンゴルの方々、中村先生、山形大学の国際交流課の方々には、本当に感謝しています。ありがとうございました。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

この2週間を経て、私はいくつかの面で大きく変わりました。

一つ目は人生観です。モンゴルの学生たちは皆いくつかの言語を話すことができるようですが、その理由として皆が話していたのが、将来モンゴルを出て海外で働きたいからというものでした。私は今まで、日本以外の国で暮らすことなど考えたこともありませんでした。です所以他们の考えに最初は驚きました。しかし、今回の経験を経て、自分が育ってきた国とは異なる国の文化に触れることは、自分にとって刺激になり、視野が広くなり、成長に繋がるということがよく分かりました。加えて、今までは日本以外の国で暮らしていくことなど到底できないと考えていたのですが、この 2 週間で案外、海外でも暮らしていけるんだということを実感しました。したがって、将来海外で暮らすことも視野に入れてもいいのではないかとこの気持ち芽生えました。

【学生大使 実施報告書】

2つ目は日本に対する考え方です。私は日本での暮らしについて、特に何も考えることなく生きてきました。しかしながらこの 2 週間を経て、日本が様々な点で暮らしやすい国であるということが分かりました。これからはこの生活を当たり前のものだと思わずに、誇りを持って生きていきたいと思います。

最後に、私を大きく変化させてくれた学生大使の活動を、もっと広めたいと考えるようになりました。外国に行くことは大きな成長に繋がります。そのため学生大使の活動に限らずとも、海外へ行ったことのない人はぜひ一度、海外へ足を踏み出してみることをおすすめしたいです。その中でも特に、学生大使として海外へ行けば、ただの旅行では見ることのできないその国の文化に触れることができるので、学生大使として海外へ行くことを強くおすすめします。そのため機会があれば、ぜひ今回の経験を広めていけたらいいなと考えています。

6 現地での活動写真

写真1

日本語教室の様子



写真2

ホストファミリーのサカと、その叔母夫婦



写真 3

みんなでモンゴル風ラーメン屋さんへ昼食に



写真 4

街を歩いていたら馬に乗った少年たちと遭遇！

